

『今月の天候と農作業』

通巻第5621号
11月号
平成30年11月8日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 11月10日(土)～ 11月16日(金)

期間のはじめは高気圧に覆われて晴れますが、その後は前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、期間の中頃に雨の降る所があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 11月17日(土)～ 11月23日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 11月24日(土)～ 12月7日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆大豆

1 収穫と乾燥

収穫時の大豆の青立ち株や雑草は、茎汁で汚損粒の原因になるため抜き取ります。成熟期は完全落葉し莢色が黄色から変色し、莢がカラカラと音がする頃です。コンバイン収穫では、さらに10日ほど待ち、茎水分の高い早朝の作業は避けます。

播種が遅れた圃場では莢の位置が低くなることもあるため、泥の混入に注意します。乾燥作業時の高温は、しわや皮切れを起こすため温度を30度以下にします。

◆ソバ

1 収穫と乾燥

バインダーや手刈りでは、子実の70～80%が黒変した頃の朝夕に行い、10日ほど島立てし、子実が粉状になるまで乾燥します。コンバイン収穫では、80～90%黒変した時ですが、茎葉に水分が多いと機械に詰まるので注意します。乾燥は静置式乾燥機などで温度は30度以下とし、その後は風選し、粒選別機などで夾雑物を除きます。

◆麦類

1 圃場の準備

排水良好な圃場を選び、碎土は丁寧に行います。周囲や3～5畝間隔に溝を掘り、湿害対策をします。麦は酸性土壌に弱いので、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は1t程度とし、元肥は地区基準を参考にします。

2 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行います。播種は早すぎると凍霜害を受けやすく、遅れると穂数不足になります。山間部では11月中旬、沿海部では同下旬から12月始めに行います。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

1 1月末までは寒暖の差が大きいいため、夕方早い時間から内張ビニルを閉めきって保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の温度管理を心掛けましょう。特にきゅうり、トマト類の比較的低温で管理する作物は、夜温がそれほど下がらない場合、内張ビニルを閉める時間を遅くするなど、状況に応じた管理を行います。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培は子づる及び孫づるの収穫期となり、成り疲れにより草勢が低下しやすいため、適期に収穫を行い、不良果は早めに摘果します。かん水は反当1.5～2 t/日を目安に行い、追肥は草勢や着果状況に応じて施用します。窒素成分で反当5～6 kg/月を目安に液肥として施用します。ハウス内の温度管理は、午前中26～28℃、午後23～25℃、夜間12～14℃とします。

促成きゅうりは摘心栽培、つる下ろし栽培ともに、主枝から側枝収穫期となります。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢をコンパクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが大切です。10℃を目安に夜温管理を行います。夜温が高い場合、果実肥大を優先せず、内張ビニルを解放し、ハウス内の湿度を下げるなどの対策を行います。追肥は主枝収穫開始と同時に開始し、反当窒素成分で0.2 kg/日を目安に行います。かん水は果実肥大にあわせておこないますが、反当0.8～1.0 t/日を目安に少量多回数で行います。日中の温度管理は、ハウス抑制きゅうりに準じて行います。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量も多くなり、最初の収穫最盛を迎えます。作物本体への着果負担も大きく、収穫遅れは草勢低下を招き、うどんこ病等の発生を助長するため、適期収穫を心掛けましょう。草勢維持のため、果実の着果状況に応じてかん水、施肥管理を行います。目安として、かん水は反当1.2～1.5 t/日、追肥は反当窒素成分で0.2 kg/日とします。下旬より収穫の終了した第3分枝のフトコロ枝を順次除去し、通風、採光の改善を図りましょう。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトともに収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水と追肥を行います。追肥は草勢を見て、大玉トマトで第3果房、ミニトマトで第5果房開花時より開始し、反当窒素成分で1 kg/1週間（ミニトマトの場合は2割程度増やす）を目安に施用します。ハウス内の温度は、午前中25～28℃、午後22～25℃、夜間8～10℃とします。ミニトマトの夜温は大玉トマトより1～2℃高めに管理します。

◆いちご

今年は、花芽分化、頂芽の出雷とも平年並みのようです。夜温管理として、開花肥大期は10～12℃、着色期8～10℃、収穫期7～8℃を目安に、ほ場の生育状況に合わせた温度管理を行ってください。中旬より電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2.5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで5分間/時間、暗期中断は深夜1時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節をします。

(黒木正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆たまねぎ

定植時期となります。地力の高い排水の良い圃場を選定し、十分な根域を確保するための深耕や、表面排水を促すための排水溝の整備をします。排水があまり良くない畑では、可能な限り畦を高くします。

植付けの深さは3～4cmです。深植えすると収穫時に縦長球（レモン球）が多くなるため注意が必要です。植付け後3～5日間は株元にかん水を行い活着を促します。

◆らっきょう

分球を始める時期です。分球及び生育促進のため、10a当たり窒素成分で5kg程度を追肥し、土寄せを行ってください。

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期です。収穫遅れや地上部の生育が悪かったほ場のもの、雨天後収穫のいもは貯蔵性が劣るので、長期貯蔵は避けましょう。罹病いもや傷いもも貯蔵中に腐敗しやすいので除きます。また、9℃以下の低温にあると腐敗しやすく、18℃以上では萌芽します。貯蔵の適温は13℃、適湿度は90%であるため貯蔵庫の温湿度管理に留意します。収穫直後のいもは呼吸作用が大きいので、一度に大量に入庫すると庫内のCO₂濃度が上昇したり、湿度が高くなりすぎ結露する場合があります。入庫時から空調を積極的に利用して結露を防止しましょう。空調が無い場合は貯蔵適温の時間帯に換気して庫内を除湿し、新鮮な空気と入れ替えましょう。

◆さといも

翌年の種芋保管のためには「枯れ上がり症状」の見られた圃場や、「芽つぶれ症」、「乾腐病」の疑いがあるものは使用を避け、優良なものだけを子いもが離れないように株毎に保存します。圃場で保存する場合は、低温障害をうけないよう、厚めに培土するなどの対策が必要で

す。

また、今年の疫病の初発には、残さ処理の不徹底によると思われる事例がありました。収穫後は早めに片付けましょう。残さの分解を進めるため、トラクタ速度を遅く、ロータリー回転を高くし、できるだけ細かく破碎をします。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

(杉村 幸代)

果 樹

◆中晩生かんきつ全般

樹体に肥料が吸収され、秋肥の効果を十分に果たすためには、12℃以上の地温が必要とされ、今月がその時期に当たります。年明けに収穫される日向夏や不知火などのかんきつ類ではこの時期の施肥が、翌年の花芽充実に有効とされています。11月中旬までに施肥を行いましょう。

◆日向夏

日向夏は土壌の乾燥や施肥量不足等により、秋から冬の落果が助長されます。落果防止剤(マデック乳剤)を11～12月に散布しましょう。

◆完熟きんかん

10月からの秋季加温で十分に肥大が確保された園では、昼温や夜温を徐々に落としていきましょう。肥大不足の園では、秋季加温を継続しましょう(昼間の温度は28℃、夜間は外気温+3℃の15～16℃を目安とする)。

◆マンゴー

花芽分化に向けた管理として、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度で抑え、夜間の最低気温6～8℃程度を維持しましょう。

十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。五割程度の花芽発生を確認したら、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に上げていきます。急速に温度を上げて花芽を生長させると、花粉の形成不良や子房の生育不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を助長します。開花が始まるまではできるだけ昼間の高温を避け、じっくりと花芽を生長させましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆キク

11月になると、気温の低下に伴って植物体が結露しやすくなります。曇雨天で夜温が高いと加温機が作動しないため、白さび病の発生リスクが高まるので、親株床から予防防除を徹底して本ぼへの持ち込みを防ぐとともに、本ぼ内では送風により結露を防ぐなど、各種湿度対策を上手に組み合わせて予防に努めましょう。

年末出荷作型は摘蕾期になります。花首の徒長を防止し、花のボリュームを出すために、摘蕾作業は適期に実施してください。

◆スイートピー

採花開始時期となります。

天候の変化に十分注意し、曇雨天後の晴天が予想される場合は、あらかじめカルシウム剤を葉面散布するなどして、生長点や葉の焼けを防止する対策を取ってください。

◆デルフィニウム

中山間地域では、1番花の収穫が終了したほ場において、ロゼットを打破させるためにハウスを開放し、低温に遭遇させてください。

沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を活用して茎の硬化を図るとともに、収穫後は適切な前処理を行うことで花落ちを防止しましょう。

また、2番花のロゼットを回避するため、1番花の花穂伸長終了時から電照を開始してください。

◆トルコギキョウ

生育後半の過剰施肥と曇雨天によりブラスチングが多発するため、追肥は発蕾前に終わってください。

一方、10月定植株は葉先枯れ症状（チップバーン）が発生しやすい時期となるため、徐々にかん水を控えて根域を広げるとともに、カルシウム剤の葉面散布や硝酸カルシウム水溶液のかん注処理を行い、カルシウム欠乏状態にならないようにしましょう。

◆ラナンキュラス

気温及び地温が低下するため、徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を図ってください。

最低気温の低下に伴って夜間の加温が必要になるため、早めにダクトを設置するとともに、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を開始しましょう。

（藤原 明紀）

畜産

◆家畜

今月は朝晩の冷え込みが厳しくなる時期に入るため、朝夕の畜舎カーテンの開け閉めを行い、畜舎内の温湿度環境の改善を図りましょう。また、本格的な冬を迎える前に、幼畜用の保温機材の点検と、子牛の保温箱や風よけ等の寒冷対策の準備を行いましょう。さらに、和牛や乳牛では、農作業が集中する時期で、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されることから、交配期にある牛については、朝夕の観察の徹底を図りましょう。

豚では、岐阜県での豚コレラの発生や中国でのアフリカ豚コレラの発生があり、国内での発生リスクが高まっています。これらの伝染病から農場を守るため、豚舎の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。また、鶏では、鳥インフルエンザの発生リスクが高まる時期に入りますので、防鳥ネットの点検補修を行い野鳥や野生動物の侵入を防ぐとともに、出入り口の消毒や鶏舎周囲への消石灰の定期的な散布も行いましょう。

◆飼料作物

牛の粗飼料では、飼料用稲、二期作・遅まきトウモロコシ、ソルゴーなどの収穫時期と、イタリアン・エン麦などの、秋冬作の作付け時期が重なる時期です。飼料作物の栽培においては、飼養管理に影響が出ないように計画的な作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、イタリアン・エン麦を植え付ける前には、土壌分析を行い、分析結果に基づいた適性な施肥管理（苦土石灰、ヨウリン等）を行いましょう。

(三角 久志)

工芸作物

◆茶

1 寒害・凍害防止対策

近年は暖冬傾向で茶樹の耐寒性獲得が遅れる傾向にあり、秋冬期(11月～12月)防霜の重要性が高まっています。更に、冬期の寒害・凍害の防止対策では、防風垣や防風ネットを設置します。また、幼木園では、敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はうね間中央に寄せましょう。万一 幹割れが発生した際は、速やかに株元へ土寄せを行います。

2 病虫害の防除

一番茶前の密度増加が気になるカンザワハダニに対しては、整枝・裾刈り後に行う越冬前の防除が重要です。

飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤付着を確めながら、専用ノズルで適正防除に努めましょう。

また、県内茶園ではチャトゲコナジラミの発生も拡大しているため、マシン油乳剤によるカンザワハダニとの同時防除を行います。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施し、11月下旬頃までには行いましょう。

また、伐採後は、葉枯らし乾燥を1～2カ月程度実施しましょう。

2 発生操作

ほだ起こし時期は品種によって異なるため、最低気温（例 低中温性品種であれば最低気温が10度前後に下がったとき）を考慮して決定しましょう。

また、ほだ起こし後に散水を行うとより発生しやすくなります。

なお、風が強く吹き込むほだ場は乾燥によってしいたけの生育が不良になったり、変形しやすくなるので、防風ネット等を設けると良いでしょう。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の、土壌伝染性病害の菌密度の低減と、土壌消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を10日おきに3回以上行いましょう。

2 耕作予定ほ地の土づくりの為、石灰・ようりん等の散布を行い土壌改良に努めましょう。

石灰散布をする場合は、石灰に消毒剤の成分が吸着され、効果が半減するので消毒処理1ヶ月後に散布しましょう。

3 土壌消毒を実施する際には、薬害、公害のないよう十分注意し、農薬使用基準に則って土壌水分が60%程度（軽く握った時に割れ目が2～3個できる程度）の時期を選んで実施しましょう。また、土壌消毒剤の空缶は、地域で決められた方法で適切に処理しましょう。

4 良質堆肥（10アール当たり1,200kg以上）施用に向けて、材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるために水分60%程度保ちながら月に一回程度切り返しを行い、堆肥の腐熟促進を図りましょう。

また、塩素グレー発生防止のため脱塩した堆肥を使用しましょう。

5 販売終了後は、乾燥機・貯蔵庫・作業場の清掃を徹底しましょう

(宮崎県たばこ耕作組合)

お知らせ

【台風24号等で被害に遭われた農業者の皆様へ】

国や県の災害復旧の事業等の利用を希望される方は、市町村担当課までお問い合わせください。

(宮崎県農業経営支援課・農産園芸課)

【収入保険の申請期限迫る！】

収入保険の申請期限が個人の方は11月末までとなっています。

収入保険は、災害による収量減少だけでなく、販売価格の低下なども含めた農業収入の減少を総合的に補てんする新しい保険です。

加入申請や制度に関するお問い合わせは、最寄りの農業共済組合までお願いします。

(宮崎県農政企画課)

内容の詳細について

11月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	やや少	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入防止に努めます。一部の地域で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
	ハスモンヨトウ	並	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って野外からの侵入を防止します。
冬春きゅうり	べと病	やや多	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。 さらに、窒素切れによる草勢の低下や逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。
	うどんこ病	やや少	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病 (MYSV)	—	ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)の感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し埋却処分するか、完全に枯れるまで密封処理します。
	ミナミキイロアザミウマ	並	
タバココナジラミ	少	タバココナジラミには薬剤の効きにくいタイプの発生が確認されていますので、薬剤散布後は防除効果を確認し、不十分な場合は、異なる系統の殺虫剤による追加の防除を行います。	
冬春ピーマン	斑点病	並	いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。 黒枯病は、多湿条件で発病しやすいので排水を良好にするとともに、マルチの利用、日中の換気を行います。
	うどんこ病	並	
	黒枯病	並	
	ミナミキイロアザミウマ ヒズメハアザミウマ	やや少 やや少	ミナミキイロアザミウマは10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病	並 やや多	どちらも多湿条件下で発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気に努めます。また、多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並	トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミによって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り適切に処理します。
	タバココナジラミ	並	
冬春いちご	うどんこ病	並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。 炭疽病は、多湿にならないようにほ場の排水対策を十分行うとともに、発病株は周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。
	炭疽病	並	
	ハダニ類 アブラムシ類	やや少 やや少	収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
かんきつ類	ミカンハダニ	少	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は、収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや少	本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きくなります。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

